



Title	19世紀イングランドにおける福祉の対象としての老人と教区聖職者
Author(s)	戸渡, 文子
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2008, 42, p. 27-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19世紀イングランドにおける福祉の対象としての 老人と教区聖職者

戸 渡 文 子

はじめに

この論文の目的は、19世紀イングランドにおいて老人が福祉の対象として定義される過程で、国教会の教区聖職者が果たした役割を明らかにすることである。1830年代以降の教区において、聖職者が老人を福祉の対象とみなしていく過程には、専門職化と政教分離という外的な要因や、ジェンダーという内的な要素が深く係わり合っていたことを明らかにしたい¹⁾。

近代社会における老人の構築過程の問題は、これまでも社会学や歴史学研究において扱われてきたテーマである。クリス・フィリップソンやアラン・ウォーカーら、批判的老年学の研究者は、20世紀における福祉国家が、定年退職と老齢年金の制度化をとおして、依存を特徴とする老人を創り出したと主張した²⁾。この「老人の構造的依存」理論に対して反論する歴史家は少なくない³⁾。しかし、老人が構築される過程で国家年金制度や退職制度が果たした役割を重視する点では、研究者の意見は一致している⁴⁾。本稿では、19世紀の教区聖職者に注目することによって、福祉の対象としての老人が創造される過程が、従来の研究のなかで描かれてきたものよりもさらに複雑であったことを明らかにしたい。

これまでのイギリス老人史研究において、19世紀は、救貧法のもとで高齢を理由に「労働不能」とみなされた者が地域社会による救済の対象と

なっていた18世紀と、福祉国家のもとで老人が福祉と対象として定義された20世紀の狭間にある時代として理解されてきた。それは、経済自由主義の影響を受け、福祉に関する問題を政治的に解決することが最大限に回避されるなか、福祉の対象としての老人の存在が認識されにくかった時代として描かれてきたのである⁵⁾。

むろん、こうした見解に対する反論も存在する。1834年に成立した新救貧法は、公的救済の削減とワークハウスとよばれる施設内での被救済者に対する厳しい管理と統制を導入したが、この「劣等処遇」の原則が、老人に対しては厳格に適用されなかったという議論がある。ガートルード・ヒメルファーフによれば、救貧法改正の策定者は、「労働不能」な老人と病人に対する救貧の削減は想定しておらず、これらのグループには従来通りに金銭や食糧、医療や住居に係わる補助などの院外救済が与えられるべきであり、ワークハウス内でも快適なケアが提供されるべきだと主張したのである⁶⁾。しかしパット・セインによれば、救貧行政の現場では、高齢貧民は、労働可能な貧民と同じく、怠惰や自己責任の欠如といった道徳的墮落の象徴とみなされ、当局による厳しい管理と統制の対象となることも少なくなかった⁷⁾。

たほうで、1830年代以降の国教会教区という宗教の社会では、聖職者が老人を福祉の対象とみなすという関係が形成された。この過程を明らかにすることが本稿の目的である。同時代の専門職化のなかで、国教会聖職者は、法律や医療、教育などの領域における権威を急速に失い、神学の知識にもとづく「宗教の専門家」になることを要請された。しかし同時に、政教分離が進展するなかで国家の法・政治システムの一部としての機能を失った国教会は、福祉という領域に自らの社会的な存在意義を求めざるを得なくなる。さらに、教区において影響力を増しつつあった女性信者の要求も受けて福祉の担い手としての役割を演じるようになった聖職者は、老

人を福祉の対象とみなしていくのである。

しかし、19 世紀半ばまでに「女性労働」、すなわち無償労働との定義が強まりつつあった福祉活動に従事することは、聖職者の専門職としての地位の確立にとってマイナスであった。無償労働とみなされがちな女性労働との結びつきは、職業の労働価値の低下をもたらしたからである。専門職としての地位に対する不安を抱いた聖職者のなかには、専門職としてのマスキュリティの維持に努め、老人に個人的な看護や癒しを提供する関係から距離を置こうとする者もいたのである。

1878 年に国家年金制度の導入を提案し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイギリス本国における老齡年金運動の展開に大きな思想的影響力を及ぼしたのが、教区聖職者のウィリアム・ルーリ・ブラックリであった⁸⁾。このことから、福祉の対象としての老人が創造される歴史的過程の理解にとって、19 世紀の教区聖職者と老人との関係が変化する過程を詳細に考察することの意義は大きいといえよう。

以下ではまず、1830 年代以降に教区聖職者と老人との関係の変化をもたらした外的な要因として、第 1 節では専門職化を、第 2 節では国教体制の転換にともなう教区の変容を取り上げて論じる。さらに第 3 節では、教区聖職者と老人との関係を規定した内的な要素として、ジェンダーを分析する。そのうえで第 4 節では、1830 年代から 80 年代にかけて、教区で実際に活動した聖職者が書き残した日記を使用し、教区における聖職者と老人との具体的な関係を考察したい。

第 1 節 専門職化の影響

1820 年代まで、国教会聖職者は内科医や法廷弁護士と並んで、伝統的な支配層であるジェントルマンの次・三男が就くのに適切な専門職とみなされていた。専門職といえども、19 世紀以降のそれとは制度的に異なり、

教区聖職者の任命権（パトロネジ）の多くは地主ジェントルマンによって所有されていた。教区聖職者は、宗教の専門家であるまゝにジェントルマンであり、地域社会の秩序を維持し、教育、医療、福祉に係わる世俗的な役割を果たすことが期待されていたのである⁹⁾。さらに、国教会は国家の法・政治体制の一部として機能していたため、聖職者の権威は、宗教的な指導者としての専門的な知識や技術ではなく、国教会としての特権的な地位に由来していたといえる¹⁰⁾。

1820年代末から1850年代にかけて、法律や医療など、従来は聖職者が影響力を及ぼしていたような領域において専門職化が進展した。アンソニー・ラッセルによれば、専門職化にともない、聖職者には神学的な知識にもとづいた宗教的な機能のみが残され、彼らにとっては、新たに「宗教の専門家」としての地位を確立することが重要になった¹¹⁾。

職業の専門職化に必要なのは、専門知識の確立をととして労働価値を高めることである。また大学における専門教育課程を整備し、資格試験の管理をととして無資格者の排除をすすめることも重要であった¹²⁾。1833年にはエクセター主教のヘンリ・フィルボッツが、主教座聖堂を大学卒業者のための専門教育機関として利用することを提案している。実際に1839年とその翌年には、チチェスターとウェルズ主教区に神学校が設立された。さらに1840年代から50年代にかけては、ケンブリッジとオクスフォードの両大学に、従来よりも優れた聖職者教育を提供することを要求する声が強まる。この要求をうけて、ケンブリッジ大学は学位を取得した学生が任意で受験する神学試験を導入し、ほとんどの主教が、同大学を卒業した候補者に対してこの試験に合格することを聖職者任命の条件として課すようになる¹³⁾。

しかし国教会では、専門職化に逆行するような展開もみられた。国教体制のもとで、全住民が国教会の成員とされていた時代とは異なり、

1820年代末以降の政教分離の動きのなかで、国教会にとっては自ら勢力を拡大し信者を獲得する必要が生じたため、聖職者の増員が急務であった。実際に聖職者の総数は、1841年の14,613名から1861年の19,336名へと増加している¹⁴⁾。ただし、従来のように、いわゆるオクス・ブリッジの両大学を卒業して聖職に就いた者の数は、1842年から1862年にかけて半減した。アラン・ギルバートによれば、1830年代には、ジェントルマンの子弟が国教会を「あらゆる専門職のなかでも最も魅力的」なものとみなすことができた。しかし、1860年代までに、オクス・ブリッジを卒業した若い男性にとって、国教会は魅力的なキャリアの選択肢とはみなされなくなる¹⁵⁾。そうであるとすれば、聖職者の総数は誰によって補われたのだろうか。

1862年には、新たに聖職者として任命された者の3人に1人が、非大学卒業者であった¹⁶⁾。これらの非大学卒業者に対して聖職者になるための専門教育を提供した機関のひとつに、カンブリア州に設立されたセント・ビーズ神学校がある。1848年から1850年、1859年から1860年、1868年から1869年の各時期にこの学校に在籍した学生の親の職業のリストがある。このリストによれば、1848年から1850年に在籍した107名の学生のうち、8名(7%)については、親の地位が「ジェントルマン」と記載されていた。また聖職者を含む専門職の親を持つ学生数は、27名(25%)であった。最も多いのは、非国教派聖職者、教師、農民、事務職、中小商工業者、商店主といった、下層中産階級と分類することが可能な職業であり、その数は67名(59%)にのぼった。さらに、1名の学生の親は労働者(レイバラ)であり、残りの8名については、親の職業が記されていない。下層中産階級の出身者が占める割合は、1859年から1860年にかけては53%、1868年から1869年までは51%と、僅かに減少するが、それでも半数以上を占め続けている。労働者の親を持つ学生数は、1859年か

ら1860年にかけての3名(4%)から、1868年から1869年の6名(6%)と徐々に増加した¹⁷⁾。

神学校に入学した学生は、聖書研究、ラテン語、説教法の習得、および教区運営にかんする実習など、2年間の専門教育を経て、主教区が管理する筆記・口答試験に合格すれば、聖職に就くことができた。大学での専門教育課程の修了を資格試験受験の条件とし、門戸を狭めつつあった医師や弁護士に比べると、国教会聖職者は、参入がしやすく、しかも安定した社会的地位を期待できる職業であったといつてよい¹⁸⁾。このように1860年代までに、国教会のなかに、従来とは異なるタイプの聖職者が登場したのである。

教区では、聖職者の狭義の宗教的な職務の重要性が増した¹⁹⁾。各主教は直属の部下である大執事や地方執事をとおして、教区聖職者たちに対して、礼拝を一度ではなく朝夕の二度にわたって行うように圧力をかけた。そうした圧力は、1830年代末には、各地で効果を表し始めた。たとえばオクスフォード主教区では、日曜日に一度しか礼拝を行わない教会の割合は、1818年には40%であったが、1838年までに、19%に低下している²⁰⁾。説教は、日曜礼拝のなかでもとくに重要な部分と考えられるようになった。聖職者として任命される前に、候補者は説教の主題の選び方や準備の仕方、発声法について、一通りの訓練を受けた。また聖職者として教区に赴任したあとも、説教の技術を磨くことを求められた。

さらに国教会の上層部は、教区聖職者の宗教的な機能を重視し、世俗との区別と聖性の強調を求めた。1856年5月、リッチフィールド主教のジョン・ロンズデイルは、口答試験に合格し正式に聖職者に任命される前の「執事」の身分に就いた若者に向かって、「労働の大切さと、キリストの使者として生き人びとの精神を監督するという重大な責任を持つこと、ひとたび執事になると元には戻れず、世俗的な地位に就くことは不可能であるこ

と」を強調している²¹⁾。

しかしながら、教区の社会において、聖職者は国教会上層の要請とは異なる、むしろそれに矛盾するような教区民からの期待に直面することになるのである。次節では、教区聖職者の実情について検討する。

第2節 教区の変容

1845年、イングランド中西部ウォリックシアのダンチャーチ教区の司祭ジョン・サンドフォードは、自らの実体験にもとづいて聖職者のために著した手引書『教区』のなかで、教区というシステムと、そのなかでの聖職者の役割について次のように語っている。

教区は、何よりも常駐の聖職者がいることによって、社会福祉と社会改良を最も効果的に提供する。適度な広さと人口をもつ教区においては、牧師は全ての教区民たちの知人であり、共通の友、そしてカウンセラーである。牧師の仕事とは、現世と宗教的な福祉を向上することである。若者を指導し、病人と老人を看護し、貧者をケアし、さらに教区民たちに慈善と善意を奨励することが、牧師に課された義務であり、彼の幸福の源泉となる。この義務をいかに果たすかという点に、社会は広く深い関心を抱いている²²⁾。

このように教区の社会における聖職者の理想とは、たんに宗教の専門家であるばかりでなく、福祉の提供者としての役割を演じることであった。

聖職者の福祉的な役割の重要性が増した要因のひとつとして、国教会そのものの変容を指摘することができる。1820年代末には、それまで政教一致体制を支えてきた自治体法および審査法の廃止(1828年)と、カトリック解放法の成立(1829年)にともない、国家と国教会の分離が進展した。さらに救貧法改正法(1834年)は、救貧法を運営する権限を教区からと

りあげ、出生・死亡・婚姻登録法（1836 年）は、それまで国教会が管理してきた教区住民登録制度を廃止した。国教会は政治的な機能を喪失し、国家システムから切り離された単なる「教会」に変容したといえるだろう²³⁾。

こうした動きのなかで、国教会聖職者が自らの社会的な存在意義を主張することのできる領域であったのが、福祉である。19 世紀初頭から、救貧法による貧困の公的救済は経済自由主義の支持者によって激しく批判され、私的な慈善活動や家族、個人が福祉の責任を負うべきであると唱えられた。このような主張にもとづいて、1834 年までに救貧法改革が推進され、公的救貧の削減がすすんだ。福祉が政治的に解決すべき問題とはみなされなくなったがゆえに、聖職者は新たに福祉の中心的な担い手としての役割を主張することができたのである。イングランド南部ハンプシアのアボッツ・アン教区で司祭をつとめたサミュエル・ベストは、1839 年に『教区における聖職』を出版し、そのなかで次のように訴えた。「新救貧法がわれわれの貧者たちの幸福と安心を脅かしているとき、彼らの福祉を促進することが、われら聖職者の活動の主要な目的となる」。ベストによれば、福祉活動を行うことこそが、人びとを信仰に導き、他の宗派ではなく国教会への信頼を回復するための最善の方法であった²⁴⁾。

聖職者が福祉的な活動に関与するようになった要因として、女性の社会進出との係わりも指摘しておきたい。イングランド中東部リンカンシアのサウス・リンゼイという農村教区における 1825 年から 1875 年にかけての宗教活動の実態について調査した歴史家ジェイムズ・オベルケヴィッチによれば、この時期には、女性の教会活動への参加が、男性のそれと比較してより活発になった。伝統的な社会では、日曜日の教会礼拝への出席が公的な義務であったために、その義務は、家族の代表としての男性のものとみなされていた。それに対して、1820 年代末以降、宗教活動が私的な性

格を帯びるものへと変化したことによって、女性がより活発な役割を演じることが可能になった、とオベルケヴィッチは論じる²⁵⁾。またヒュー・マクリードが指摘するように、19世紀の宗教において、男性よりも女性が教会の信者としてより活発になったことは、政治や経済の領域において女性の活動が著しく制限されたこととも深く関係していた。少なくとも1850年代まで、宗教は、女性が家庭という閉じられた空間を離れてその影響力を社会に拡大するための、ほぼ唯一の領域を提供したのである²⁶⁾。

とりわけ中産階級の女性にとって、教会は、この時代の女性にほぼ唯一容認された社会活動である慈善活動のセンターとしての意味があった。中産階級女性は、資金の寄付をとおして、あるいはヴォランティアの活動家として、教会が提供する労働者階級を対象とした慈善活動に携わることによって、地域社会に自らの影響力を拡大し、大きな満足感と自信を得ることができた²⁷⁾。1830年代以降の国教会聖職者は、教会の影響力を維持・拡大するうえで、このような女性たちの支持に対する依存を深めていくのである²⁸⁾。

この点を如実に表した史料がある。1838年、ヘンリ・ナッシーという若者が、イングランド南部チチェスターのアーンリー教区に助祭として赴いてから約1ヵ月後の日記には、次のような記載がある。「デューク夫妻を訪ねた。夫妻には幼い子どもがいて、とても善良な人びとである。夫人の手元には、教区において石炭・衣服クラブを設立するための活動資金が準備されていた。今日は聖トマスの祝日ということもあり、私はその活動について少し調べてみることにした。この教区には、多くの貧者はいないようであるし、ひどい困窮状態は存在しないように見えるのだが」。ナッシーはその後まもなく、夫人の「貧者に対する心配と、彼らを助けたいという願い」に圧倒され、石炭・衣服クラブを設立し、貧しい教区民を訪問して参加費の集金を開始した²⁹⁾。

ところで、本節の冒頭で引用したジョン・サンドフォードの教区システムに関する記述のなかでは、聖職者の福祉的な活動の対象として、教区民のなかでも、病人や貧者、若者とともに、老人のカテゴリーに関心が向けられていることがわかる。つまりこの手引書では、福祉の提供者としての聖職者像が形成されるのと同時に、その福祉の対象者としての老人像が強調されたといえるのである。

1820年代末以降の教区聖職者が実体験にもとづいて著した手引書によれば、老人に対する訪問活動は、聖職者の重要な義務のひとつとみなされるようになった。ヴィジティングとよばれる訪問活動は、そもそも聖職者が教区民の宗教的状况を監視するための手段として同時代に広く導入され始めたものである。1829年に教区運営のための手引書を著した著名な福音主義の聖職者ダニエル・ウィルソンによれば、聖職者は、全教区民の家を訪問し、家族の一人一人の性格、必要な物資、精神状態、生活習慣を観察しなければならない。また訪問先の家族が、日曜礼拝に出席しているかどうか、安息日を遵守しているかどうか、子どもの指導は行き届いているかどうか、家族全員の信仰の状態はどうか、といった点について知識を収集することが重要である。そのうえで、家計管理の方法や、子どもの躾と教育、祈りの捧げ方について、個人的な指導を行う³⁰⁾。

サミュエル・ベストは『教区での職務』のなかで、訪問活動の対象者を、病人、健康な者、老人の3グループに分類する。ベストは、訪問活動が成功を収めやすいのは、子どもの病気など、訪問先の家族に不幸があったときであることを、自らの経験にもとづいて自信をもって断言することができる、と助言する。「家族の問題により深く立ち入って、子どもの順調な成長や不幸に対して共感を示せば示すほど、より簡単に機嫌をとることができ、説教や忠告に耳を傾けてもらうことに成功する」³¹⁾。さらにベストは、老人を「聖職者の頻繁な看護が必要であり、多くの時間を割かなけ

ればならない対象」として指摘する。ベストによれば、老人に対しては訪問のほかに、コテッジ・リーディングと呼ばれる集団での聖書朗読会を開くほか、教区図書館に集めて時間を過ごさせることが喜ばれた。看護の方法について、ベストは、親切で優しい態度が必要であり、身体的な癒しをととして、魂の癒しへと近づくべきだと助言する。さらに、教区が運営する相互扶助組織の会員である老人に対しては、週に一度、老齢手当が支払われる機会に、十分な注意を払い、宗教的な指導を施すことも必要である³²⁾。

ロンドンのハロウ・ウェルド教区で終身助祭を務め、1862年に『教区での生活』を出版したエドワード・モンロも、「教区民の中で最も重要な集団」であり、聖職者の就労時間の大半を使って訪問活動を行うべき対象として、子ども、若い女性、病人とともに、「寝たきりの老人」というカテゴリーを挙げている³³⁾。このように聖職者の手引書は、訪問活動が、教区民を監視し宗教的な指導を行う手段であるばかりでなく、老人に対して看護を提供する機会としての意味をも帯びようになったことを示している。

第3節 ジェンダーの考察

この節では、19世紀半ばに教区聖職者と老人の関係が変化した過程は、専門職化や政教分離などの外的な要因と併せて、ジェンダーという内的な要素とも深く係わり合っていたことを示したい。教区における福祉的な活動の期待が高まるなかで、国教会聖職者は、福祉の管理者としての専門職化を推進することも可能であったはずであるが、実際にはそうはならなかった。これは、同時代には福祉と女性性との結びつきが強まり、福祉に従事することが専門職化の妨げと認識されるようになったためであると考えられる。

歴史的にみて、専門職としての地位の確立の過程が、女性や女性労働とみなされる要素の排除を伴っていたことについては、多くの研究者が指摘している³⁴⁾。専門職化とは、専門知識の確立による労働価値の向上を意味していたが、この過程にとって、無償労働とみなされがちであった女性労働との結びつきはマイナスであったため、女性労働との差異化が図られたのである。その具体例としてこれまでの研究でよく取り上げられてきたのは、1858年の医師法制定を到達点とした医師の専門職化である³⁵⁾。ハリエット・ブラッドリーは、医師に対する大学での専門教育の確立と病院施設の整備にともない、男性医師の仕事としての「治療 cure」と、女性の仕事とみなされた「看護 care」が厳然と差別化されていく過程を明らかにしている³⁶⁾。

1830年代以降、聖職者に対して「老人の看護」など、福祉的な活動に従事する期待が高まったことは、聖職者の専門職化の動きに矛盾していた。というのも、19世紀のイギリスにおいて、福祉活動は、「女性労働＝無償労働」としての定義が強まり、それと同時に、中産階級女性の多くが、実際に福祉や慈善活動に進出したからである³⁷⁾。専門職化を目指していた聖職者にとって、この種の女性労働に従事することは、労働価値の低下と専門職としての地位の墮落を意味していた。

1853年、聖職者の専門雑誌として刊行された『聖職雑誌』の誌面では、福祉活動への従事と聖職者の専門職としての地位の問題をめぐる、論争が展開した。まず同誌11月号は、宗教的な職務にのみ従事し、教区民の福祉に関心を示さない聖職者を批判する内容の説教を好意的に紹介した。その説教によれば、聖職者を「ただの説教師へと貶める」のは誤りであり、「週2日は訪問活動に費やし、家から家へと訪れ、残りの日は病人と老人の訪問を行い、午後は慈善の目的のために寄付金を集めて過ごす」者こそ、教区民にとっての「父親」のような、理想的な聖職者であった³⁸⁾。

続いて同誌12月号は、この記事に対する匿名の教区聖職者からの反論を掲載している。その投稿者によれば、「聖職者が説教以外の仕事をしないとしても、それが聖職者の地位の墮落になるとは考えられない」。説教と祈りをとおして神の言葉を説くことこそ、最も高尚な職務であり、その職務こそ、聖職者はそのほかの義務よりも優先するべきである。この投稿者はさらに続けて、聖職者は慈善的なクラブの管理者や集金者としての活動と無関係であればあるほど、聖職者に独自の仕事である「魂の救済」をより効果的に遂行できると主張する。むしろ、慈善組織を管理し、そのために集金するといった作業は、「レディたちの活動領域内であるため」、聖職者の妻か、女性の友人に任せる方が適切である。そうした友人がいない場合に限り、聖職者が自ら福祉的役割を果たす必要がある、と投稿者は指摘する³⁹⁾。

むろん、この投稿者のような見解が聖職者全体に共有されたものでなかったことは、『聖職雑誌』11月号に掲載され論争の発端となった評論の内容からも明らかである。しかし、福祉的役割の重要性の増大にともなって、専門職としての地位に不安を抱いていた聖職者が存在したことは、注目に値する。

実際に、1850年代半ばには、専門職化を果たした医師と比べて、聖職者は不完全な専門職であるとのイメージが社会に広がりつつあったことを示す史料がある。1857年1月12日に『タイムズ』紙に掲載された社説によれば、聖職者という専門職は、官僚や医師のような専門職と比較して、労働時間や達成すべき目標が明確ではなく、「職務が不明瞭であること」に苦悩していた。ここで語られている聖職者の「不明瞭」な職務の内容とは、「肌着やブランデーを求めてやってくる老婦人」や、「息子についての悩みを相談しにやってくる母親」に丁寧に対応し、行儀の悪い子どもたちと、「腹痛、ぜんそく、リウマチ、足の痛みに苦しむ者全て」の世話を

することなどである。しかし、大部分の教区聖職者が、これらの「不明瞭な」仕事を、良心的かつ熱心にこなしている、とその社説は結ばれている⁴⁰⁾。

専門職としての地位の喪失という危機のなかで、19世紀半ばの聖職者のなかには、教区における福祉活動に関与しながらも、可能なかぎり、女性労働との差別化を図り、専門職としてのマスキュリニティを維持しようとする者がいた。女性労働としての福祉活動との差別化を最も強く主張した聖職者のひとりが、ジョン・ヘンリ・ブランドである。ブランドは、薬品の製造業者に数年間雇用されたあと、1850年に27歳でダラム大学に入学し、聖職に就いた人物である⁴¹⁾。つまり彼は、第1節でも確認したように、国教会聖職者という職業への参入によって、下層中産階級から専門職への社会的地位の上昇を果たした男性たちのひとりであった。このような背景があったからこそ、ブランドは聖職者の専門職としての地位の低下をとくに憂慮すべき問題とみなしたのである。

ブランドは1857年に「労働する男 a working man」という匿名で『われわれの困難とその克服法』というパンフレットを出版し、聖職者の労働に対する社会的な評価の低下を指摘したうえで、それに対する解決策を提案している。そのなかで彼は、神学教育と、礼拝や聖餐式・洗礼・埋葬といった儀式に係わる技術の訓練の強化の必要性を訴えるのとともに、聖職者は他の専門職男性と同様に「仕事熱心な男たち」であり、「実際に労働に従事しているのだ」ということを社会に対して見せつけるべきであると主張する。さらに、教区聖職者が中産階級女性を訪問活動のような「女性的な仕事 feminine work」に従事させることの重要性を強調するのである⁴²⁾。

専門職としてのマスキュリニティの主張は、聖職者と老人との関係にも影響を及ぼした。ブランドは1864年に聖職者のための手引書『教区の指導』を出版した。そのなかで彼は、聖職者による訪問活動の最大のニーズは、多くの老人のあいだに見出されると述べる。さらに、訪問する聖職者は、

受け手によって単なる「貧者の友」として身体的な癒しを与えに来た者とみなされてはならず、訪問活動を、技術的にも困難で、神学の知識を要する高尚な職務として遂行しなければならないと強調する。そのうえでブランドは、老人を「国教徒」、「非国教徒」、「無関心な者」に分類し、いかに適切な宗教的指導を行うべきかを詳細に検討した。ブランドにとって、老人は福祉の対象というよりは、宗教的な「治療」の対象であった⁴³⁾。

聖職者による訪問の技術的な水準の高さと神学的な知識が強調されるいっぽうで、訪問による食糧や衣服の配布は、女性労働と定義され、中産階級女性を中心とするヴォランティアに任すべきであると考えられた⁴⁴⁾。教区聖職者の手引書から得られる女性訪問員の典型的な姿とは、以下のとおりである。女性訪問員は、聖職者から指名される場合もあれば、立候補のあと聖職者によって任命される場合もあった。各訪問員には、担当地域が割り当てられ、各地域に住む貧しい家族を訪問し、その家族が日曜礼拝に出席しているか、子どもが教区教会で洗礼を受けたか、日曜学校に通っているかを確認し、問題があれば適宜指導を行う。また家族の職業や生活習慣、道徳的な性格について観察する。妻や母親たちに正しい家庭生活の管理の仕方について教育することも、女性訪問員の役目であった。老人に対しては、「救済に値する者」として、必要な物資の援助が行われた。救済の内容については、定期的に行われる総会において協議され、最終的に聖職者による承認が得られれば、支援物資は訪問員によって配布された⁴⁵⁾。

しかし教区には、聖職者がマスキュリニティに傷を付けることなく従事することのできる福祉活動が存在した。それは、相互扶助組織の管理と運営である。相互扶助組織の管理が聖職者の重要な役割であることについては、聖職者の福祉活動への従事に対して深い懸念を抱いていたブランドも同意している⁴⁶⁾。教区の相互扶助組織は、近隣のエリート層からの寄付によって設立され、労働者階級男性の会員からの拠出に応じて、疾病保険

や老齢年金のほか、死亡の際の妻子への手当を給付するというものであった。聖職者は相互扶助組織の運営を、単なる福祉活動ではなく、救貧法に依存する堕落した人間とみなされていた労働者階級男性に対して、老齢や疾病における経済的自立の重要性を教育し、労働者としての責任と自覚を教えるための活動であると認識していた⁴⁷⁾。このような組織の管理に携わることによって、聖職者は、労働者階級男性に対する自らの経済的、道徳的優位を確認し、中産階級男性としてのアイデンティティを主張することができたといえよう。ジョン・サンドフォードによれば、聖職者が各教区において相互扶助組織を運営するのは当然の義務であった。というのもこの活動をとおして、聖職者は「この王国内の全ての男性」に、病気や老齢に備え、経済的な自立を維持するための施設を提供することを目指さなければならないのである。サンドフォードは、こうした活動を「男らしい慈善 manly benevolence」と表現している⁴⁸⁾。

第4節 聖職者と老人の具体的関係——日記史料をたよりに——

本節では、教区聖職者の日記を史料として用いて、聖職者と老人との具体的な関係を考察したい。19世紀の社会において、日記は、自伝や手紙と同様に、階級、ジェンダー、宗教などのアイデンティティを書き手が主体的に構築する場としての重要な意味をもっていた⁴⁹⁾。聖職者個人にとって、日記は、専門職化という大きな社会変化のなかで、専門職としての中産階級男性のアイデンティティを形成し、主張する場であったとみなすことができる。しかしながら、国家と国教会の分離という歴史的变化のなかで、教区聖職者は、女性領域との定義が強まっていた福祉活動に従事することを求められ、老人に対するケアの提供も期待された。専門職としてのマスキュリニティの不安という心理的な状況のなかで、教区聖職者は老人といかなる関係を形成したのだろうか。

本節では 1830 年代から 1880 年代の期間に教区で実際に活動した聖職者 3 名の日記に言及するが、主な考察の対象とするのは、イースト・サセックス文書館に所蔵されているジョン・コウカ・エジャトンの日記である。エジャトンは、1857 年から 1887 年にかけて、イングランド南部サセックス州のバーウォッシュ教区で、助祭と司祭を務めた。彼は、ウォリックシアの教区聖職者の息子として誕生し、1850 年にオクスフォード大学を卒業後、54 年に修士号を修得、ウィルトシアの教区ナントンに助祭として赴任する。1857 年には、バーウォッシュ教区で司祭を務める叔父ジョン・グールドのもとに助祭として赴く。エジャトンが司祭に昇格していた 1866 年の時点で、彼の年収は 700 ポンドに達しており、同時代の聖職者のなかでも、経済的には比較的地位の安定した立場にいたといえる⁵⁰⁾。

バーウォッシュは農業を主要な産業としており、7000 エイカーの土地に、多くの農家とコテッジが点在する教区であった。表 1 は、1871 年の国勢調査結果にもとづき明らかとなったバーウォッシュ教区の性別・年齢別人口を表したものである。それによると、60 歳以上の人数は、男女合わせて 194 名であり、全人口の 8.7 パーセントに相当した。これは、同年のイングランドとウェールズの全人口に占める 60 歳以上の割合である 7.4%を僅かに上回っていた⁵¹⁾。

表1 バーウォッシュにおける性別・年齢別人口（1871年）

年齢	男性	女性	合計	%
0-59歳	1,041	997	2,038	91.3
60-69歳	60	54	114	5.1
70-79歳	33	33	66	3.0
80歳以上	8	6	14	0.6
合計	1,142	1,090	2,232	

出典: 18 Apr. 1871, *Sussex Advertiser*.

1857年7月、助祭としてバーウォッシュ教区に到着した直後のエジャトンは、司祭が不在時には日曜礼拝、洗礼、葬式、結婚式の司式を担当した。エジャトンの日記には、全体として、教会での礼拝に係わる宗教的な職務に熱心に従事する聖職者の姿が描かれている。助祭としてのエジャトンの仕事は、教区の少年、少女のための学校の運営も含まれていた。エジャトン自身は、男子学校で読み書きの授業と歌唱指導を受け持ち、女子学校では女性が教師として雇われていた。

老人訪問活動の記録は、教区聖職者の日記の重要な構成要素である。エジャトンは、バーウォッシュ教区に到着後すぐに、前任者の助祭から、教区内に住む何人かの老人の名前を知らされた⁵²⁾。このことも、聖職者にとっての老人訪問の義務の重要性を示している。日曜日以外のエジャトンの日常は、教区の老人と病人の訪問活動や、貧しい家族に食糧や衣服、石炭、読み物などを提供するためのクラブの運営など、福祉活動で占められていたといってもよい。以下は、エジャトンのある日の午後以降の過ごし方である。

年老いて身体が動かないジェイムズ・ウォーターハウスを訪れて聖書を読む。バーリンガー・ファーリーの夫人を訪問。彼女には11人の子どもがいるが、30代のように見える。身体が不自由で、寝たきりのヘザリントン夫人を訪問。夕食。そのあと図書クラブのためにローズ・アンド・クラウンへ⁵³⁾。

ただしエジャトンの日記は、老人への訪問が、あくまで宗教的な目的で行われたものであることを示している。「訪問し、聖書を共に読む」を意味する‘C&RW’の文字が訪問対象者の名前の前に添えられた記載が、日曜日を除いて、ほぼ毎日途切れることなく続いている。老人に対して、聖書や祈祷書を読み、宗教的な慰めを提供するという義務を継続して行い、

それを日記に書くことによって、エジャトンは、「宗教の専門家」としての聖職者としての姿を確認していたともいえよう。

エジャトンよりも少し年代は遡るが、サマセット州の都市部の教区フルームで終身助祭を務めていたアルフレッド・ダニエルの1841年6月の日記にも、次のような記載がある。

月曜日14日 老女を訪問し、話しかけたが、自分自身の苦しみについて主張するばかり。キリストの受難について指摘をしても、彼女は知ったかぶりをするだけであった⁵⁴⁾。

1846年、ダニエルは管轄区域であるトリニティ教会地区において、自分の妻を筆頭に、近隣に住む9名の中産階級女性から構成された「地区訪問協会」を設立した。これらの女性ヴォランティアは、教区民の家庭を訪れ、女性や子ども、老人に対して、毛布や石炭、衣服などの配布を行った。その過程で、聖職者による宗教的な指導が必要なケースがみつかった場合は、訪問員は直ちにそれを報告し、ダニエルが聖書や祈祷書を読むために訪問するという役割分担が成立した⁵⁵⁾。同時代において女性領域として認識されていた老人に対するケアの提供からは距離をおき、宗教的な職務を果たすことによって、ダニエルは、専門職としてのマスキュリニティを維持しようとしていたといえよう。

聖職者の日記に表れた、ヴォランティアの女性訪問員が従事するような老人福祉活動との差異化を図ろうとする態度は、同じ男性であっても、労働者階級男性の教区訪問員の日記には見られなかったものである。1849年以降、国教会教区では「聖書読師」と呼ばれる男性訪問員が有償で雇用された。ドナルド・ルイスの研究によれば、こうした男性訪問員の多くは、労働者階級出身であった⁵⁶⁾。ロンドンのイズリントン教区の一部であるオール・セイント教会地区で雇われた読師‘J.R.’による、1863

年から64年にかけての活動日誌のなかには、次のような記述がある。

（金曜日 1863 年 12 月 18 日）デイヴィス（寡婦）、年老いて貧しく、病を患っている。1 シリングの石炭用チケットを渡し、ペチコート用チケットについても薦めてみると、彼女は大変感謝した。その感情は言葉にならず、ただ「私達は、この世の最良の友人だわ」とだけ言ったのである。私は、彼女を慰めるために、二言三言、語りかけた⁵⁷⁾。

このほかにも、『J.R.』の日誌には、読師と老人との個人的で親密な関係についての記述が多くみられる。これらの記述は、聖職者男性を拘束したマスキュリニティが、労働者階級の男性には共有されていなかったことを示唆している。

考察の対象をエジャトンの日記に戻すと、彼は、1862 年から約 5 年間のロンドンの教区における勤務を経て、1867 年 3 月にバーウォッシュ教区の司祭に就任した。1860 年代末から 1880 年代にかけてのエジャトンの日記からは、彼が活発に関与した福祉活動の一つが、「バーウォッシュ共済クラブ」の運営であったことがわかる。教区の男性が集う相互扶助組織であるこのクラブは、1835 年にエジャトンの叔父である当時の司祭によって設立されたものであった。同クラブは、拠出のみを行い手当の給付は受けないという「名誉会員」と、拠出し手当の給付を受ける「受益会員」から構成され、前者による寄付金は、疾病保険だけでなく、高齢の会員にも安定した給付を行うための予備の資金として用いられた。クラブの運営に関する日常的な業務は、受益会員の労働者階級男性たちに任されており、エジャトンは、年 4 回の会議で司会をつとめ説教を読んだほか、緊急の問題が生じたときには適宜指示を出した⁵⁸⁾。労働者階級男性の相互扶助活動を管理し、彼らの老年期における経済的な自立を支援するという活動は、エジャトンにとって中産階級男性としてのアイデンティティを主張する場

であったといえるのではないだろうか。

しかし実際には、1870年代から1880年代にかけての農村教区における財政状況の悪化によって、教区レベルでの相互扶助組織の運営は難航した。1871年までに、バーウォッシュ共済クラブは財政難に陥り、受益会員同士や、エジャトンと会員の間でも摩擦が頻繁に生じるようになる。会員のなかには、教区司祭によって運営されるクラブよりも、同時期に近隣の農業労働者によって結成された「ケント・サセックス労働組合」が開始した疾病保険のサービスを利用することを望む者も多くいたようである⁵⁹⁾。エジャTONは日記のなかで、会員の多くが、彼の注意にもかかわらず集会の際に飲酒に及び、年4回の会議の場所をパブに移動することを要求し、司祭による説教を聞くことを拒否することについて、不満を表している⁶⁰⁾。

1880年には、共済クラブは財政的に破綻し、解散されることになった。53名の若い会員は、18歳から40歳までを対象とする新しいクラブを独自に設立し、エジャTONが運営に関与することを拒否した⁶¹⁾。この後エジャTONは、約30名の老齢会員が別の新しい共済クラブ「オールド・メンズ・クラブ」を設立する際に支援を提供することになる⁶²⁾。このことは、老齢男性に対する経済的自立の支援という枠組みのなかで、エジャTONが老人福祉活動に係わっていたことを示している。この「オールド・メンズ・クラブ」への関与は、エジャTONが1887年に急逝するまで継続して日記に記載されている。

おわりに

1830年代から1880年代にかけて、教区聖職者と老人との関係は、専門職化、国家と国教会の関係、ジェンダー関係の変化など、様々な要素との相互の係わり合いのなかで変化していった。1830年代以降の教区聖職者は、専門職化の要請と、老人に対するケアの提供を含む、地域福祉の担

い手としての役割にかんする教区民の期待との狭間で揺れ動く存在であった。福祉は女性労働であるとの定義が強まるなかで、聖職者が福祉活動に従事することは、専門職としての中産階級男性のアイデンティティの崩壊という状況をもたらしかねなかった。そのなかで、老人を対象とする福祉活動に関与しながらも、個人的なケアや癒しを提供する女性ヴォランティアの仕事との差異化をはかることによって、マスキュリニティを維持しようとした聖職者もいた。

1878年に「国民倏約保険」制度の確立の必要性を訴え、イギリスで初めて国家老齢年金制度の構築に向けた本格的な運動を始めたウィリアム・ルーリ・ブラックリは、ハンプシアの農村教区ノース・ウォルサムで、相互扶助組織である友愛組合を管理していた教区聖職者であった⁶³⁾。第4節で考察したエジャトンと同様に、ブラックリは、1870年代に、財政難によって教区における組合活動の行き詰まりに直面し⁶⁴⁾、その経験をとおして、国家による疾病保険と老齢年金の制度化を要求する論文を執筆するに至った。1878年以降に次第に進展していった国家レベルでの福祉の対象としての老人の形成という動きの背後には、本稿で考察したような、1830年代以降の教区という地域的なレベルでの聖職者と老人との関係の変化があったのである。

注

1) 本稿は、筆者による以下の小論をさらに発展させたものである。拙稿「聖域の男たち——19世紀国教会の専門職化とジェンダー——」川北稔・藤川隆男編『空間のイギリス史』山川出版社、2005年、90-103頁；Ayako Towatari, 'Construction of old age and religion: English parish in the nineteenth century and the impact of migration', David Bates and Kazuhiko Kondo (eds.), *Migration and Identity in British History: Proceedings of the Fifth Anglo-Japanese Conference of Historians* (Tokyo, 2006), pp.131-40.

2) Alan Walker and Chris Phillipson, 'Introduction', in Phillipson and Walker

- (eds.), *Ageing and Social Policy: A Critical Assessment* (Aldershot, 1986), p.2.
- 3) リチャード・スミスは、17世紀に成立した救貧法のもとでは、高齢者は救済の対象とみなされていたと指摘し、教区会計簿を対象とする研究をとおして、実際に教区による救済対象の大部分が60歳以上の高齢者であったと論じた。またポール・ジョンソンは、20世紀における福祉国家による年金と退職の制度化が、家族による経済的な援助や労働市場からの老人の「自立」を可能にするというポジティブな側面を備えていた点を強調する。Richard M. Smith, 'The structured dependence of the elderly as a recent development', *Ageing and Society*, 4/4 (1984), p.424; Paul Johnson, 'Parallel histories of retirement in modern Britain', in Paul Johnson and Pat Thane, (eds.), *Old Age from Antiquity to Post-Modernity* (London, 1998), p.223.
- 4) Sarah Harper and Pat Thane, 'The consolidation of "old age" as a phase of life, 1845-1965', in Margot Jefferys (ed.), *Growing Old in the Twentieth Century* (London, 1989), pp.43-61.
- 5) Richard M. Smith, 'Ageing and well-being in early modern England: Pension trends and gender preferences under the English Old Poor Law c. 1650-1800', in Johnson and Thane, *Old Age*, pp.64-95; Sussanah R. Ottaway, *The Decline of Life: Old Age in Eighteenth-Century England* (Cambridge, 2004), pp.9-15.
- 6) Gertrude Himmelfarb, *The Idea of Poverty: England in the Early Industrial Age* (London, 1984), p.161.
- 7) セインは、イギリスで初めて「老人問題」が発見されたのは、老齢年金制度をめぐる論争が本格化した1878年以降だと主張している。Pat Thane, *Old Age in English History: Past Experiences, Present Issues* (Oxford, 2000), pp.166f.
- 8) 拙稿「世紀転換期イギリスにおける老齢年金制度とマスキュリニティ」『歴史学研究』第844号、2008年、13-16頁。
- 9) Anthony Russell, *The Clerical Profession* (London, 1980), pp.28-38.
- 10) W.J. Reader, *Professional Men: The Rise of the Professional Classes in Nineteenth-Century England* (London, 1966), p.15.
- 11) Russell, *op.cit.*, pp.38, 40.
- 12) Magali Sarfatti Larson, *The Rise of Professionalism: A Sociological Analysis* (California, 1977), pp.14-18.
- 13) Alan Haig, *The Victorian Clergy* (London, 1984), pp.72-76.
- 14) *Ibid.*, p.3.

- 15) Alan D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change, 1740-1914* (New York, 1976), p.133.
- 16) *Ibid.*, p.133.
- 17) Haig, *op.cit.*, p.127.
- 18) たとえばダン・グレイトレクスは、セント・ビーズ神学校を卒業後に聖職者になった若者のひとりである。彼は1852年にはリンカンシアの建築士事務所の事務員として働いていたが、病気を理由で解雇されたあと、短期間は機械の修理工などをして糊口をしのいでいた。1854年には、知人から経済的な支援を受けて神学校に入学する。2年間の教育を受けたあと、グレイトレクスは就職活動の末に、80ポンド程度の年収で、スタッフォードシアの工業都市ビルストンの教区助祭として雇用されることになる。のちにグレイトレクスはロンドンに異動になり、ホワイトチャペルにあるセント・ポール教会のヴィカーに出世し、年収200ポンドを得た。Dan Greateorex, *Diary*, Tower Hamlets Local Hisotry Library and Archives, TH8833.
- 19) Gilbert, *op.cit.*, pp.133-134.
- 20) Frances Knight, *The Nineteenth-Century Church and English Society* (Cambridge, 1995), pp.76-86.
- 21) Dan Greateorex, *Diary*, 17 May 1856, Tower Hamlets Local Hisotry Library and Archives, TH8833.
- 22) John Sandford, *Parochialia: or, Church, School, and Parish. The Church System, and Services, Practically Considered* (London, 1845), p.205.
- 23) Gilbert, *op.cit.*, p.133.
- 24) Samuel Best, *Parochial Ministrations* (London, 1839), pp.23f, 31f.
- 25) James Obelkevich, *Religion and Rural Society: South Lindsey 1825-1875* (Oxford, 1976), p.313.
- 26) Hugh McLeod, *Religion and the People of Western Europe 1789-1970* (Oxford, 1981), pp.29-31.
- 27) *Ibid.*, p.31.
- 28) 次の著作は、20世紀初頭のロンドンのサザック教区において、子どもに教育を提供し、困窮に対して援助の手を差し伸べる教区聖職者に対して、労働者階級女性が大きな支持を示したことを指摘している点で興味深い。Sarah C. Williams, *Religious Belief and Popular Culture in Southwark, c.1880-1939* (Oxford, 1999), pp.98-103.
- 29) Henry Nussey, *Diary*, 21 Dec.1838, 4 Jan. 1839, pp.43, 49, British Library, Eg MS.3268.

- 30) Richard Baxter, *The Reformed Pastor. Revised and Abridged by the Rev. William Brown, with an Introductory Essay, by the Rev. Daniel Wilson* (Glasgow, 1829), pp.xli, xlii.
- 31) Best, *op.cit.*, p.108.
- 32) *Ibid.*, pp.91-111.
- 33) Edward Monro, *Pastoral Life*, pt.1 (Oxford, 1862), pp.73-76.
- 34) 専門職とジェンダーの関係については、以下の文献を参考にした。Harriet Bradley, *Men's Work, Women's Work* (Minneapolis, 1989), pp.188f; Michael Grossberg, 'Institutionalizing masculinity: The law as a masculine profession', in Marc C. Carnes and Clyde Griffen (eds.), *Meanings for Manhood: Constructions of Masculinity in Victorian America* (Chicago, 1990), pp.133-51; Anne Witz, *Professions and Patriarchy* (London, 1992), passim.
- 35) Reader, *op.cit.*, pp.167-82; Witz, *op.cit.*, pp.73-103.
- 36) Bradley, *op.cit.*, pp.188-92.
- 37) F. K. Prochaska, *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century England* (Oxford, 1980), passim.
- 38) *The Clerical Journal and Church and University Chronicle*, 22 Nov, 1853, p.285.
- 39) *Ibid.*, 22 Dec.1853, pp.343-344.
- 40) *The Times*, 12 Jan. 1857.
- 41) 'John Henry Blunt', Dictionary of National Biography CD-ROM.
- 42) [John Henry Blunt] *A Working Clergyman, Our Difficulties, and the Way to Deal with Them* (London, 1857), pp.17, 20, 23, 26.
- 43) John Henry Blunt, *Directorium Pastorale. Principles and Practice of Pastoral Work in the Church of England* (London, 1864) pp.196-99.
- 44) *Ibid.*, pp.331f.
- 45) Thomas Vowler Short, *Parochialia: Consisting of Papers Printed for the Use of the Parish of St. George's Bloomsbury, during the Years 1834-1841* (London, 1842), pp.54f.
- 46) Blunt, *Directorium Pastorale*, pp.228f.
- 47) Best, *op.cit.*, pp.42-48.
- 48) Sandford, *op.cit.*, pp.349, 362.
- 49) 日記がパブリック・アイデンティティの構築に果たした役割については、以下の文献を参照した。Andrew Hassam, *Sailing to Australia: Shipboard Diaries by Nineteenth-Century British Emigrants* (Manchester, 1994),

- pp.135-53.
- 50) John Coker Egerton, Diaries, East Sussex Record Office, AMS.5637/1-10, AMS.6193/1-10; Roger Wells (ed.), *Victorian Village: The Diaries of the Reverend John Coker Egerton, Curate and Rector of Burwash, East Sussex 1857-1888* (Phoenix Mill, 1992).
- 51) B.R. Mitchel and Phyllis Deane, *Abstract of British Historical Statistics* (Cambridge, 1962), pp.11f.
- 52) John Coker Egerton, Diaries, 15 Jul, East Sussex Record Office, AMS 5637/1.
- 53) Ibid., 20 Jul. 1857, East Sussex Record Office, AMS 5637/1.
- 54) Alfred Daniel, Diary, 14 Jun. 1841, Bath Central Library, MS.1115.
- 55) Ibid., 20 Sep. 1846, Bath Central Library, MS.1120.
- 56) 同年に設立された「国教会聖書読師協会」の会則によれば、読師に就任できるのは、22歳から45歳までの心身共に健康な国教会の信者で、聖書の知識に精通している者であるとされた。Donald M. Lewis, *Lighten their Darkness: the Evangelical Mission to Working-Class London, 1828-1860* (London, 1986), pp.107-12.
- 57) All Saints District Chapelry, Battle Bridge, Parish of Islington, parish visitor's report book, 15 Oct., 18 Dec. 1863, London Metropolitan Archive P83/ALL1/73.
- 58) *Sussex Agricultural Express*, 21, 28 May 1867.
- 59) Wells, *op.cit.*, p.182.
- 60) John Coker Egerton, Diary, 23 Feb. 1872, East Sussex Record Office, AMS 5637/6.
- 61) 5 Nov. 1880, Wells, *op.cit.*, pp.233f.
- 62) 26 May 1885, 14, 15 May 1886, Wells, *op.cit.*, p.321.
- 63) 本稿註8を参照されたい。
- 64) 'Quinquennial progress of the branches', in *Fifty-Seventh Annual Report of the Hampshire Friendly Society*, unpagued.

[付記 本稿は平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B））課題番号19720191による成果の一部である。]

（文学研究科助教）

SUMMARY

Construction of Old Age and Parish Clergymen in Nineteenth-Century England

Ayako TOWATARI

In the history of old age in Britain, the nineteenth century has been often described as the period when the dominance of economic liberalism posed a challenge to the traditional right of those too old to work to communal relief and 'old age' *per se* was not seen as a problem to be solved by social policy. During this period, a different attitude towards old age emerged among parish clergymen. This essay attempts to illustrate changes in the relationships between parish clergymen and old people, using prescriptive literature and manuscript diaries written by clergymen between the 1820s and 1880s. It explores the process in which old people came to be seen as a particular group in need of support against the background of larger historical changes such as professionalisation and the change in the Church-State relationship. It also discusses the influence of gender in the attitudes of clergymen towards old people.

After the late 1820s, professionalisation had the effect of reinforcing a new emphasis on the more specifically religious aspects of the clerical role. However, the separation of the 'Church and State' brought about a change in the kind of social role expected of a clergyman in the parish: he was valued for his part in promoting social welfare, including the care of old people. However, clergymen faced a threat to their professional status by getting involved in this kind of work, as it became increasingly categorized as 'women's work' in the nineteenth century. As a result, some clergymen attempted to assert masculinity, emphasizing the division of roles between male professional attendance and female voluntary care for old people.

キーワード：老人，国教会聖職者，専門職化，世俗化，ジェンダー